
とある雨の日

阪野隆平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある雨の日

【著者名】

NZマーク

阪野隆平

【あらすじ】

三月のある日。突然降ってきた大粒の雨が心を濡らしていく

外に出ると雨が降っていた。

まだ寒さの残る三月の雨の日。

朝からポツポツと降っていた雨は冬の寒さを含んでいて、せっかくの春の到来が遠ざかつたような気分だ。

心無しか、開きかけていた桜の蕾も再び閉じこもってしまったよう気がする。

冷えた手を温めるため手に吐息を吹きかけると、白い息が出て驚いた。数日ぶりに見た白い吐息に、今度は白い溜息を吐く。

春にはまだまだ遠い。

冬は嫌いだ。嫌いな理由は単純、寒いからだ。寒がりの人間に、これ以上の理由が必要だろうか？

春や夏は好きだ。秋も、まあ寒くなれば過ごしやすくていい。だが冬は嫌いだ。子どもの頃から、ずっと。

ああ、忘れていた。

傘を傘置きから取り出して思つ。

雨も嫌いだった。

雨という天氣は、好き嫌いがはつきり分かれる天氣だと思つ。屋内にいるときは、雨音が樹や地面を打つ音がリズミカルで、自然と安心することができる。

しかし外になると話は別。

ビチャビチャになつた地面は当然、傘を差していても横から入つ

てぐる水滴は天からの嫌がらせだ。服は濡れるし、髪も濡つてしまつてせつかくのセットが乱れる。

やつぱり晴れだ。季節は夏で天気は晴れ。それが一番。

だが現実にはなにも起こらない。

雨の止む気配なし。

肩を落とす。

学校から駅までの距離は約一キロ。

その間、どれくらい濡れてしまうだろう。

今から気分が暗くなる。

空を睨んだ。雨が止むと思えなかつたが。

案の定、駅に着いたときには悲惨な状態だつた。傘を差していたから、ずぶ濡れにこそならなかつた。しかし、服は所々湿り、履き慣れた靴は雨水を吸いこんで、靴下まで水浸しだつた。

最悪だ。

ポケットにある携帯電話が震えた。一通の受信メールが届く。送信者の名前をみて、口元がほころぶ。しかしメールの文面を読みすすめていくうち、読む前よりも気分が落ち込んでいった。

「ちくしょう

思つた言葉がそのまま口から零れていた。視界が滲み、画面に水滴が落ちる。

それはおそらく。

電車に乗つて帰路につく。顔は俯けたまま、周囲と田舎を合わせな

いよいよ、それだけに神経を集中させていた。まともな電車内の記憶はそれだけ。

今日は最悪の日だ。第一志望の高校に落ちたとき並に最悪だ。
なにが、なにがつ…………！

それ以上は考えないよにした。そうしなければ電車の中でも雨が降りそうだつた。

視界同様、電車の窓ガラスも曇り、外の様子がわかりにくかつた。

やつぱり雨の日は最悪だ。

気づくと、いつの間にか駅に降りていた。しかも一駅早い。
なぜ？ と自分に問いかけても返つてこない。

今日はほととんじん厄日のようだ。

追い打ちをかけるように冷たい北風が通り過ぎる。水分を多量に含んだ風は、全身を震わせるのに充分だつた。

やつぱり冬の寒さは大嫌いだ。

右手に持つ傘の柄と左手の中にある携帯を握りしめる。軋む音が両手から聞こえた気がした。

幸い、歩いて帰れない距離ではない。その分、雨に身を打たれる時間が長くなるが。

心中では言葉にならない感情が渦巻いたが、俯けていた顔を上げた。

もへ、いいや……。

毒を食らわば皿まで。なるよになれ、だ。

開き直る気持ちで駅を出た。

どうせ濡れているのだ。これ以上、濡れても足が疲れても大した違いはない。

駅を出ると、相変わらず春とは思えない空氣と風だった。冗談抜きで冬に逆戻りした気分だ。

一足早く咲いた梅が不憫でならない。花びらが冷たい雨に打たれて萎びてきている。

傘を持つていないうまの腕を大きく振つて早足で歩くが、普段運動をしていないせいすぐに息が上がる。しかも傘も差しているため、いつも以上に動きづらい。絶えず口から息が吐き出されているのが見える。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……。

心の中で黒い悪態を吐き続ける。

一滴の雨が頬を伝づ。その雨が地面に落ちたと同時に、歩みを止めていた。

なぜかは……わかつていた。
わかつていたが……再び歩きだす事ができない。
どうすれば再び進めるかが、わからなかつた。

雨粒を防いでいた傘が手から離れる。傘が地面を転がる。

「なに……してるんだろ……」

ようやく出でてきた言葉は、それだけだった。あの言葉が続かない。

まともな声はなくなり、押さえつけられるような響きに雨音に埋もれ

るようになに聞こえる。しかし次第に、閑静な道に聞こえてくるのは、悲しげな雨音だけだった。

どれほど時間が経つただろう。

いつの間にか、雨音が耳に入つてこなくなつた。

周りを見渡す。

先ほどまでと変わらない、湿つた空間だ。しかし何かが違つた。
気温も低いままだが、それでも何かが違う。

そうだ。

雨が止んでいた。

鬱陶しくて仕方のなかつた雨が降り止んでいたのだ。なぜ、と聞くのは野暮なことだろう。天気とは気まぐれで数学のようにはいかないのだ。

天を見上げる。

変わらない曇り空。それでも、心は晴れたような気持ちになる。すると額に何か、冷たいものが落ちてきた。

まさか、雨？

せつからく止んだと思ったのに、錯覚だったのか？

違つた。

天から降つてきたのは、小さな小さな白いもの。

雪だつた。

今は三月。三月に降る雪とは、珍しい。季節外れではだつたが、

響きは綺麗ではあった。

冬は嫌いだつたが雪は好きだつた。好き嫌いの線分けが無茶苦茶だつたが、子どもの頃、雪が降り積もると寒がりなのに、雪の見たさに、触れたさに外に出たものだ。

雪のよつな雪は、一歩違えば雨となりそ�で、とても儂いものだつた。それでも、宙に浮いているときは、たしかに『雪』として存在していた。

少しの気温の違いで消えてしまつ雪。

少しの行き違い、すれ違い。

ああ、そつか。

恋は、雪のよつなものだ。

少し、ほんの少し違つだけで雨となつて、溶けて消えてしまつ。その存在が、水泡にへと帰してしまつ。とても儂い、すぐに消えてしまうのだ。

もう少し、大切にしていれば。

後悔はなにも生まない。

だけど、それでも……。

携帯電話を取りだし、電話帳からある人物に連絡を入れる。
画面が雪の雪で濡れていく。

それでも、

画面を耳に押し当てる。水滴が耳を濡らすが気にしない。

変えたい！

電話が繋がった もう一度、最初からやり直そう。

全部を 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741k/>

とある雨の日

2010年10月21日22時32分発行